

社長室で考えた事 ＜第1回＞横文字大好き社員



JOI シニアフェロー 藤田 研一
(K-BRIC 代表、前シーメンス株式会社代表取締役社長兼 CEO)

.....

前職でドイツ企業の日本法人代表取締役を務めていました。社内の肩書きは役員・社長・会長と変わったのですが、同社に在籍した15年間で「マネジメント」というテーマは常に考えさせられる事柄でした。それらは外資系への就職希望者向けに「日本人が外資系企業で働くということ」と言う書籍で体系的にまとめさせてもらいました。

一方で、もっと日常的な何故や気付きもいくつかあり、こちらを軽いエッセイとして書いてみました。コーヒープレイクとして軽く読んでいただければ幸いです。

.....

読者の方々は、外資系の社員と話していて、やたらに横文字単語（たとえば英語）を使う奴にムカツイたことはないですか？私があります。自分が外資系に勤めていたのにいうのもなんですが（笑）。

たとえば、「このプロジェクトをクローズするにはプロファイが重要なのでレンダーにサウンディングしてからリファレンスを取りマテリアライズしましょう！」。何いっとるかわかります？腹立ちますよね。一部意識して日本語化すると「この案件を完了させるにはお金があるので、銀行辺りに打診してお墨付きをもらってから実現させましょう」。社内なら別に構わないのですが、お客さんとの会話がこれではものすごくカッコ悪いです。なぜカッコ悪いか？理由は話し手の単語の使い方が顧客目線でないからです。いかにも「僕は外資に勤めていて難しい英語をたくさん知っています。エライでしょう」的で、相手を不快にさせる可能性があるからです。

もちろん、外資系企業の社員が横文字単語を多用するのは当たり前です。本社とは英語（あるいは他の言語）で会話、外国人社員とも英語で会話、資料も国を超えて共有するので英語。飲みに行っても外国人が一人でもいれば当然英語（まあ、酔っ払ってくると、日本人だけでつるんで日本語でワイガヤとやるときもありますが）。専門用語も英語が多いので、とにかく「最低英語が話せなければ仕事にならない」。だから日常的な頭の訓練と慣れが必要になるわけです。

一方で、日本人のお客さんと話す時はどうでしょうか。あくまでも日本文化の中で仕事をしている人達です（一部商社や海外部門の人といった例外はありますが、あくまでも国内ビジネスの話です）。文化的にも言語的にも、相手にできるだけ合わせたコミュニケーションを心がけるのは異文化コミュニケーションの基本中の基本です。だから私は日本人に対しては、できる限り日本語で話そうとする人が好きです。自分が話す場合は、仮に横文字を癖で使ってしまったとしても、単語の意味の再確認も含めて同じ意味を日本語で言い換えるように努めています。独りよがりの横文字乱発な会話はその人のコミュニケーション能力の低さを物語っており、横文字で無理にお化粧する会話はやめるべきです。IT系など一部やむを得ないものは別としても、日本企業の人、マスコミにも言いたい事です。

この現象は、企業の社内文化でも多々起こることだと思います。企業の中には必ずと言っていいほど「その企業特有の単語や用語」があります。このケースは、使っている本人に「自分は他社の人が理解できない単語を使っている」という自覚がまったくないので、英語の場合よりももっと深刻かもしれません。

社内用語ではないですが、ブレインストーミングを「壁打ち」とよぶ人に出会ったことがあります。外資系に勤める日本人なら間違いなく「ブレスト」というと思います。単語的には英語のサウンディングに該当するのかもしれませんが、意味的にはブレストに近いと思います。「藤田さん、今度一度壁打ちしてもらえませんか？」「一緒に壁を叩くの？」「ネットミーティングでいいです。」「いや壁叩きは会わないと一緒にには出来ないでしょう？」と、何度かのやり取りの後に初めて私が壁打ちの意味を聞いて、このトンチンカンなすれ違いは終息しました。

（「社長室で考えた事 第2回：桃太郎ミーティング」 は月6下旬に掲載予定です。）